

## 情報要求に対する応答発話の準備と展開の技術について : 日本語のインタビュー会話をデータにした記述

黄, 英哲  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494565>

---

出版情報 : 比較社会文化研究. 14, pp. 25-34, 2003-10-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン :  
権利関係 :



# 情報要求に対する応答発話の準備と展開の技術について

—日本語のインタビュー会話をデータにした記述—

コウ  
黄

エイ テツ  
英 哲

## 1. はじめに

会話において、情報要求の発話に対して応答者側は直ちに返答するとは限らない。例えば、事柄への賛否を意味しない「そうですね」という前触れがまず出されて、その後正式な返答が開始する例が挙げられる。また、正式な返答に入っている、応答者のほうは情報を要求している話し相手の存在を無視して応答を続けていくわけには行かない。例えば、応答者は「～は～でしょ（上昇音調）」という表現を取り入れながら、情報要求の相手からの同調を誘発した上応答発話を展開していく現象も観察できる。

本稿では、日本語によるインタビュー会話をデータにして、その中のインタビューの応答者側が情報を求められるにあたって、その応答発話の準備と展開の技術について、詳細な記述を行う。具体的には、本稿の目的は、冒頭で取り上げた「そうですね」のようなものを応答発話の「準備技術」として捉え、そして「～は～でしょ（上昇音調）」のようなものを応答発話の「展開技術」として捉えて、インタビュー会話における応答発話の「準備技術」と「展開技術」のそれぞれの表現形式について分析を行うことである。

「準備技術」と「展開技術」は日本語母語話者にとって殆ど自然に身についたものであり、会話にあたって自然に用いる場合が多いだろう。しかし、日本語非母語話者にとってはそういった技術は技能（畠 1988, 谷口 1989, 尾崎 1996, 下瀬川 1999）として習得していかなければならない部分が多い。本稿でいう「準備技術」は順調に応答を進める技術で、「展開技術」は長い発話を作成するための技術だと考えられる。それに関する実証的記述と詳細な分類が日本語学習者が会話技術を習得する際の一助になることを願う。

## 2. 会話データと文字化作業について

本稿で取り扱うデータは劉・呉 (2000) が「台湾に在住した日本人が台湾社会文化に対する感じ方」という題目で日本語母語話者に対して行ったインタビューの録音である。<sup>(注1)</sup> 会話はすべて1対1の対話形式で行われ、会話参加者は互

いに面識のない状況である。面談の主な目的を「台湾に来た日本人の台湾社会と生活環境に対する印象を明らかにし、台湾人の性格と台湾の社会文化を再認識すること」と事前に協力者の両方に伝えられ、インタビュアーが「上記のような課題を焦点として答え手の日本人から個人情報と感想を求めてください」と協力を求められていた。このようなインタビューはロールプレイではないので、会話の自然さは一層高まると考えられる。

筆者は上記のインタビューの協力者たちの手配を務めており、その録音の処理と使用権も得ている。各インタビューが終了後、会話のやりとりを言語研究にも使用する場合もあると言明し、録音の使用許可を協力者たちから改めて承諾をもらった。そこで本稿では14組のインタビューを文字化して分析を行った。各インタビューの時間は最短16分、最長70分で、会話データは全部で約9時間である。インタビュアーとして協力してもらった8名は、日本語の非母語話者であるが、全員母語話者に近い日本語能力を持っていると考えられる。<sup>(注2)</sup>

文字化作業を行うにあたって、会話参加者のプライバシーや会社の機密を守るために、人名を英文字で略記し、そして重要な数字を示さないように心掛けている。文字化資料を読みやすくするために、漢字仮名交じり文で示すが、長音、促音、鼻音、ポーズがある場合では漢字の変換を避ける。発話ターンの交替を観察しやすくさせるために、ターンの交替が認定できた場合に行を変え、発話ターンの認定を、基本的に「一人の会話参加者が話し始めてから話し続けることをやめるまで」(李 1995)とするが、発話の割り込み、重なり、そして話し手が提示した話題の内容の陳述が完了しているか否かなどを総合的に考慮し、判断を下す。また、話し相手がターンを取らずに話を聴取したり理解したりすることを伝える表現は、あいづちと認定する。あいづちの認定については、話し手の情報提供が完結しているか否か、話題が終了したか否か、ターンの交替の有無などを総合的に考慮して判断する。本稿で用いられた実例における文字化記号は表1の通りである。

表 1：本稿における文字化記号

|     |        |   |         |     |       |
|-----|--------|---|---------|-----|-------|
| ( ) | あいづち   | + | 発話の割り込み | ……  | 省略    |
| =   | 発話の重なり | ⇒ | 注 目     | ↓   | 下降音調  |
| ↑   | 上昇音調   | — | 長音      | #   | 長い長音  |
| ,   | 自然なポーズ | ^ | 長い沈黙    | { } | 非言語行動 |

### 3. インタビュー会話における応答発話の認定

インタビューにおいて会話参加者の間にある暗黙の了解の1つはインタビューを受ける側が常に答え手という役割を担い、情報や感想を提供しなければならないことである。したがって、本稿では疑問形式の発話だけでなく、インタビュアーがした推測や確認の発話、また感想描写や伝聞陳述の発話も情報要求の機能があると考え、そうした発話の内容をめぐって応答者側が情報、感想、意見などを提供した場合は、応答が生じたと認め、それを応答発話と呼ぶ。

疑問形式の発話とは、「いつ/どこ」などと言った疑問詞が用いられる疑問発話と、「はい」か「いいえ」だけで答えてもらう質問発話である。推測や確認の発話に関する例は、次の5つが挙げられる。1) 発話の末端で「ね/よね」が付く場合。2) 発話の末端で「だろう↑/でしょう↑/でしょうか↓」が付く場合。3) 発話の末端で「じゃない↑/じゃないですか↓/～はなかったんですか↑」などのような否定の形が付く場合。4) 発話の冒頭に「じゃ/じゃあ/つまり」などの標識が用いられ、それに続いて情報要求者が応答者のことについて、推測や確認の発話を提示する場合。5) 疑問詞の付かない「～んですか」という疑問発話。

なお、感想描写や伝聞陳述の発話の例については、インタビュアーが「～って聞いていますが/～ですって/～と思いますが/～じゃないかなと思って」などのような表現で発話を終わらせようとするものが挙げられる。

### 4. 応答発話の「準備技術」と「展開技術」の定義

「準備技術」とは、情報要求の発話を受け継いだ応答発話における応答者が話そうとする内容以前の部分で、応答発話の冒頭に現れるものである。具体的に言えば、応答者は返答する前に、実際の情報伝達の内容にならない標識や表現を用いたり、もしくは相手の質問の焦点に合わせない返答を防ぐために、確認式の発話で言い返したりする現象である。本稿では、「準備技術」は応答発話における正式な返答が開始する前の「準備表現」と、応答発話が出される前の「挿入連鎖」<sup>(註4)</sup>の2つを含むと考えている。その言語形式上の特徴については、前者では、返答内容の搜索表示、返答の困惑表示、質問された内容のポイントの繰り返し、発話の受け継ぎの表示、回答しようとする内容の前置き表現、の5つが確認され、後者では「聞き返し」と「情報要

求の提示上の援助」の2種類が確認できた。

一方、「展開技術」とは、話者が話し相手の存在に配慮しながら長い発話を発展していくための、計画表現を指す。それについては、前置き表現の活用、相手同調の誘発、自問自答の応答展開、の3種類の技術があることを確認した。「展開技術」が現れる位置は応答発話の冒頭か、応答発話の途中である。

## 5. 本稿と先行研究の関連

### 5.1 準備技術に関する先行研究

まず、準備技術の1種である準備表現に関する先行研究について概観する。

準備表現における「返答内容の搜索表示」「返答の困惑表示」「発話の受け継ぎの表示」は、話者交替の時に使用されるマーカー<sup>(註5)</sup>と深く関連する。話者交替の時に使用されるマーカーを、話者が自発的に発話権を取得する時のマーカーと、話し相手が発話権を譲渡してくれて話者が発話権を受け継ぐ時のマーカーの2つに分けることができる。前者に関する考察は小室(1995)と初鹿野(1998)で見られる。小室(1995)には、「まあ」「でも、あのう」「そうですね」「いや」「ただ、あのう」「「なんで」と質問を投げる形」という記述が見られる。初鹿野(1998)の考察には、小室(1995)の記述していないものがある。例えば、「じゃあ/ごめんなさい/ちょっと」と言った言葉で始められるものと、「それは」「そんなことは、～」「今、～」「～という点では、おっしゃった通りだと思うんですね」など、前のターンの中で触れていたことに言及しターンを移行しようとしているものである。本稿では、小室(1995)と初鹿野(1998)における記述の不足を補い、「発話の受け継ぎの表示」という項目を立ててインタビューの応答者が自発的に発話権を取得し、応答を始めようとする時のマーカーについて整理を行う。

一方、これまでの論考では、話し相手が発話権を譲渡してくれて話者が発話権を受け継ぐ時のマーカーに関する記述はまだ不足していると考えられる。例えば、李(1995)と木暮(2001)では、発話権取得におけるターン全体の構造<sup>(註6)</sup>が注目されており、話者が発話権をもらった直後の表現特徴については言及されていない。それについて本稿では、「返答内容の搜索表示」「返答の困惑表示」「質問された内容のポイントの繰り返し」の3つとして詳細な考察と記述を行う。

続いて、もう一種の準備技術である「挿入連鎖」に関する先行論考を取り上げる。

情報を求めてきた話し相手の情報要求の発話に対して、応答者は応答する前になんらかの理由で聞き返すことを、

挿入連鎖と言う。聞き返しは、コミュニケーション・ストラテジー<sup>(117)</sup>として非母語話者に用いられるが、母語場面や準母語場面においても、意思疎通のための言語行動として現れうる。聞き返しの発話における機能を判断することは難しいが、尾崎 (1993) によると、聞き返しの発話意図は「反復要求」「説明要求」「聞き取りの確認要求」「理解の確認要求」「反復/説明要求」「聞き取り確認/説明要求」と6つに分けることができる。本稿で取り扱った会話の性質と発話前後の文脈から判断して、データでは「理解の確認要求」と「説明要求」の2つの意図が殆どであるが、応答者側が返答しようとするトピックは適切かについて確認を求める意図も考察できた。本稿ではそれらの意図で発した聞き返しの表現形式を整理する。

## 5.2 展開技術に関する先行研究

会話において、話者が自分の発話ターンで伝達したいことを長く続けるためには、単文より複文を使用したり、「えーと/あー」などと言ったフィラー (山根 2002) や「で/だから」などと言った接続表現を用いたりする方法があると考えられる。上記のような方法を機能上の観点から考えれば、発話ターンに現れる短い空白時間に消極的に何かを埋め込むという性質のものと、応答の進展のために積極的に計画を立てようとする性質のものに分けられる。前者はフィラー<sup>(118)</sup>と呼ばれるものに相当し、後者には接続詞を含む接続表現が挙げられる。本稿では、後者の接続表現に焦点を当てて実証分析を行うが、接続詞以外の表現に着眼する。

接続詞以外の接続表現について、李 (1997) が指摘した「情報伝達行動の持続」の技術<sup>(119)</sup>から幾つか見られる。それについて整理すると、「何が目的だったかっていう」という持続表示と、「ほら」という注目要求、そして語尾に「さ」を付ける形と「上昇音調」の使用などが挙げられる。しかし、それに関する表現形式の実証はまだ充分ではないと考えられる。本稿では、インタビューにおける応答者が応答伝達の進展面に計画効果をもたらしようとする時の接続表現に焦点を当てて考察を行う。<sup>(111)</sup> その結果、前置き表現の活用、相手同調の誘発、自問自答の応答展開、の3種類を観察することができた。そのような接続表現から、話者が積極的に応答を展開しようとする姿勢が窺え、それが接続詞とは違って、応答の進展状況を考慮した精巧な表現だと言えるので、それを「展開技術」と名付ける。

## 6. 「準備技術」に関する記述

応答発話の「準備技術」を準備表現と挿入連鎖に分けるので、この節では、準備表現と挿入連鎖のそれぞれの表現

形式について、実例を挙げながら詳細な分類と記述を行う。

### 6.1 「準備表現」の表現形式

「準備表現」について、今回のデータをもとに考察を行うと、①返答内容の搜索表示、②返答の困惑表示、③質問された内容のポイントの繰り返し、④発話の受け継ぎの表示そして⑤回答しようとする内容の前置き表現、の計5種類を取り上げることができた。この5種類の「準備表現」の機能は大きく3つに分けられる。①～③は主に時間稼ぎとして働き、④は発話を受け継ぐ願望を表す効果があり、そして⑤は実際の内容に関わる正式な返答の前の前置きという効果が働くと考えられる。

#### 6.1.1 返答内容の搜索表示

発話の冒頭で現れる搜索表示の表現形式については、山根 (2002: 153) が記述したフィラーの種類に類似した部分はあるが、発話の冒頭で出現するフィラーをすべて「返答内容の搜索表示」として捉えることがしがたい。例えば、インタビューの情報要求の発話が終わろうとする気配がないのに、応答者が応答し始めて、発話の冒頭に出した「あー」という表現は発話内容の搜索表示として考えるよりも、発話ターンの受け継ぎの表示として捉えたほうが適切だろう。本稿では、そのような状況におけるフィラーを「発話の受け継ぎの表示」という分類で整理を行う。それについて、6.1.4節で詳細な説明を行う。まず、ここで「返答内容の搜索表示」の表現形式について、下記の表2の通りに整理する。

表2: 「返答内容の搜索表示」の表現形式

|      |                                     |
|------|-------------------------------------|
| そう型  | そうですね/そうだね/そうーですね/そうね/す/すー/すー、そうですね |
| ん型   | んー/んーと/うーんー/うんー                     |
| えーと型 | えーと/えっと                             |
| ま型   | まあ/もー                               |
| 母音型  | あー/えー                               |
| その他  | あーのー/ね↓/しー                          |

表2における「そう型」の中の「そうですね」と「そうだね」のような表現は山根 (2002) では、あいづちとして捉えているが、本稿では、それが返答内容の搜索表示における典型的な表現として捉えている。また、返答内容の搜索という判断は、インタビューが情報要求の発話を終わらせて、発話ターンを応答者に渡そうとする場合か、応答者に応答を始めようとする気配がある場合である。例えば、次の例1における「どう思いますか」という表現から、インタビューのLIUは応答者のOKAに発話ターンを譲ろうとしていることが判断できる。OKAの応答発話の冒

頭における「あの一」は、発話ターンの受け継ぎの機能として捉えるより、話者が話そうとする内容の搜索表示として捉えたほうが適切だろう。

#### 例 1

LIU：で、タイチウの、その一、治安の面は一（うん）どう  
 思いますか↑  
 OKA：あの一、ちょっと、さきほどね、……………

### 6.1.2 返答の困惑表示

応答の立ち上がりに見られた時間稼ぎの表現は上述の「返答内容の搜索表示」の他に「返答の困惑表示」も考察できた。例えば、例 2 における「ひゃあ一、どうだろうな一、」という表現は「返答内容の搜索表示」に当たる。

#### 例 2

IKO：でも、香港料理ってさ、あの一、こう、<sup>^</sup>味が結構、あっ  
 さりしてるっていうように聞いているんですけども、そ  
 れだったら、日本人の、口に合うじゃないかなと、  
 KAT：ひゃあ一、どうだろうな一、香港でも、結局ね、日本人  
 は食べにくいところ、というのは（うん）普通の人は食  
 べないところが多い……………

今回のデータから観察した「返答の困惑表示」という準備表現について表 3 の通りに、1) 疑問詞入りの独り言。2) 答えにくいことの言明。3) 非言語行動の 3 つを整理することができる。

表 3：「返答の困惑表示」の表現形式

|               |                                                                                                   |
|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1) 疑問詞入りの独り言  | どうなってるかな/どうかな/どういうところかな/どうでしょうね/なんだろう/どうだろうな一/どうだろうね/なんて言うんですか↓/なんっていうのかな/なんて言うんですかね/ひゃあ一、どうだろうな一 |
| 2) 答えにくいことの言明 | 難しい、(笑いながら) もう/なんか、いや、ほ(笑いながら) もう(異常な沈黙が現れた)/ (異常な沈黙が現れた) むずかしいところだね                              |
| 3) 非言語行動      | 笑い/異常な沈黙                                                                                          |

### 6.1.3 質問された内容のポイントの繰り返し

思考時間を稼ぐ効果もたらせる方法は、もう 1 つあることが観察できた。それは、例 3 における KIT の応答発話のように、発話の冒頭で応答者が情報要求の発話における最後の語を繰り返すことである。

#### 例 3

CHO：と一、たい、あの、台湾の、あの一、宗教的な行事が多いですね(え、え、え、え) あのと、にほん、日本のお寺とか、お祭りと比べて、その雰囲気の違い  
 KIT：雰囲気の違い、(はい) そうですね、やっぱりね、すごく、こう、独特な、……………

例 3 の KIT の「雰囲気の違い」の部分は「質問された内容のポイントの繰り返し」の 1 種として捉えられ、このような言語行動は応答発話をするための「準備」になると考えられる。「質問された内容のポイントの繰り返し」という応答発話の準備表現の表現形式について詳細に考察を行うと、次の 5 種類が確認できた。1) 応答者は情報要求の発話における最後の語を繰り返す。2) 応答者は情報要求の発話におけるポイントになる語句をそのまま繰り返す。3) 応答者は情報要求の発話のポイントになる語を上昇音調で繰り返す。4) 応答者は情報要求の発話のポイントになる語句を少し変更して言う。5) 応答者は下降音調か上昇音調の「ですか」、長音を伸ばす「ね/な」を付けながらポイントになる語句を繰り返す。

第 1 種類の実例は前述した例 3 における KIT の冒頭の「雰囲気の違い」に当たるが、第 2 種類の実例は次の例 4 における KIT の応答発話の冒頭にある「住まい」という部分になると考えられる。つまり、応答者の KIT は CHO の情報要求の発話におけるポイントになる「住まい」という語をそのまま繰り返して、思考する時間を稼ぎながら、応答の準備をしている。

#### 例 4

CHO：えーと、日本に、日本に比べて、お住まいの環境はどうですか↑  
 KIT：住まい、えーとですね、わたし日本にいたとき、家族とあの一、持ち家に住んでたので、……………

第 3 種類の実例は下記の例 5 における KIT の発話の下線部である。つまり、応答者の KIT は、インタビュアーの CHO の発話のポイントになる部分の「挑戦したこと」を上昇音調で繰り返すことによって、思考する時間が稼げる一方、応答の準備をしている側面も現れている。

#### 例 5

CHO：挑戦したことありますか↑  
 KIT：挑戦したことですか↑(はい) 台湾に来てから、ないですね、(はい) あの一、……………

次の例 6 における OHA の応答発話のように、発話の冒頭で相手の情報要求の発話におけるポイントになる語句を少し変更して言うことは第 4 種類の具体例である。

#### 例 6

LIN：ですから、ん、そういう付き合いは少なくなっていますから、(うん) コミュニケーションする時間も、なくなるといふあの一ディメリットというか、(うん) あの一不利なところは(うんうん) 有りませんか↓  
 OHA：コミュニケーション取れないという不利なこと、やっぱことばの障害だよな→(はいはいはい) ことばの一、僕はすこししかまだ喋れないんだけど……………

例6におけるOHAの「コミュニケーション取れないという不利なこと」の部分も、「質問された内容のポイントの繰り返し」の1種として捉えられる。

「質問された内容のポイントの繰り返し」の第5種類目に当たる実例は例7におけるKITの冒頭の下線部である。つまり、応答者のKITは下降音調の「か」、長音を伸ばす「ね」を付けながらポイントになる語句を繰り返していることが分かる。

#### 例7

CHO: ……………えーとちなみに(はい) えーと台湾の魅力はど  
 こだと思われませんか↑  
 KIT: 魅力か↓(はい)す、魅力ねー、どういうところかなー、  
ちょっとね、あの一#^、あるんですよ、なきゃいませ  
んから……………

### 6.1.4 発話の受け継ぎの表示

「準備表現」は上で述べてきた3種類の時間稼ぎの現象だけではない。6.1.1節で少し言及していた「発話の受け継ぎの表示」も「準備表現」の1種である。「発話の受け継ぎの表示」は、応答者が積極的に応答を始めようとする意欲を示す働きがある。それについて、典型的な表現は「うん/はい/あのね/でね」などが挙げられるが、詳細な整理は表4でまとめた通りである。

表4: 「発話の受け継ぎの表示」の表現形式

|         |                                                                                          |
|---------|------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1) はい型  | はい/うん↓/うんうん                                                                              |
| 2) そう型  | そうですね(発話に割り込む時)/そう                                                                       |
| 3) えーと型 | えーとね/えーとです                                                                               |
| 4) あの一型 | あの一(発話に割り込む時)/あのね                                                                        |
| 5) ま型   | まあ/まあね/もー(発話に割り込む時)                                                                      |
| 6) や型   | やあ/いや                                                                                    |
| 7) 母音型  | あ↓/あっ/え↓                                                                                 |
| 8) 助詞型  | が(格助詞)/は(副助詞)                                                                            |
| 9) 接続詞型 | で/でね/でも/だって/というのは/だから/ただ                                                                 |
| 10) 融合型 | うん、だから/それはだから要するに/あの、まあ/うん、まあ/うん、だから/うん、や、あのね/そうです、まあ/うん、だからね/うん、で、ね↓/うん、やあ/や、もう、ね↓/あ、いや |
| 11) その他 | ね↓/要は/やっぱり/まず/まずね                                                                        |

表4における「助詞型」は目を引くので、ここで、それについて実例を挙げて説明を行う。例8と例9における下線部の「は」と「が」はこのいわゆる「助詞型」の準備表現である。

#### 例8

IKO: えっ、中国語とか、台湾語とか、  
 KAT: は、基本的にはできないね、もともとできなかったから、(はい)ただ、いちおう、二年住んでるんで、とりあえずね、道の名前を言って、移動するぐらいはできるから、……………

#### 例9

IKO: うん、でも、香港ではさ、大体、日本料理けー  
 KAT: が、多かったね、(多いですね)安い店も行くけどね、……………

例8と例9の共通点は応答者側がインタビュアーの発話をそのまま続けて発話を完成していることである。例8では、応答者のKATは「中国語と台湾語」を文の主部として借りて、応答発話を続けていっている。例9では、インタビュアーのIKOは語末で長音を延ばすことを通して、発話ターンを渡そうとしているところ、応答者のKATは「日本料理系」を主格にし、自分の応答に転じている。本稿では、その場合に出現する副助詞のハと格助詞のガを応答発話の準備表現という見方として分析を行う。

### 6.1.5 回答しようとする内容の前置き表現

例10においてCHOの質問に対して、応答者のKITはまずCHOの質問のポイントになりそうな語である「今年」を繰り返している。それから回答しようとする方向を疑問形式で「日本のでいいですか↑」と言って確認しているが、その後KITはCHOの返答を待たずにすぐに応答発話を続けていく。このような言語行動は応答発話の準備表現の1種だと言える。

#### 例10

CHO: えーと、悪いですけど、えっ今年いくつですか↑、{笑う}  
 KIT: 今年、{ちょっと笑う}日本のでいいですか↑、  
 日本ので日本の年齢で三十歳です{CHOが笑う}  
 (日本の年齢で)、はい

本稿では、例10における下線部は「回答しようとする内容の前置き表現」として捉えている。「回答しようとする内容の前置き表現」について、上述した話題の運営管理に関する前置き表現のほかに、対人的な配慮に関する前置き表現と、自己主張の緩和に関する前置き表現の2つも観察できた。具体的な表現例について下記の表5の通りに整理する。

表5: 「回答しようとする内容の前置き表現」の表現形式

|         |                                                                                               |
|---------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 話題の運営管理 | 突然話がとんじやうんですが、/まあ、これはさっきの〜の話に戻っちゃいますけど、/いまのテーマだとちょっとずれちゃうかもしれませんが                             |
| 対人的な配慮  | これ言うとなね、嫌われると思いますね、〜/〜に失礼ですけど、〜/これははっきり言うと、また、失礼に当たるかもしれないんですけど、やっぱり、〜/一つだけ、敢えて言わせていただくとすると、〜 |

|         |                                                                                                                                                                    |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 自己主張の緩和 | 誤解をされると困るんだけど/こういうことを言っちゃだめなんだけど/私は表面的に見ると、やはり、～/あくまでも個人的な感想ですけども、/本当の～って、よく分からないけど、なんだろう、やっぱり、～/私も専門外なので、よくわからないんですけども、聞いた話ですとね/一般化できるかどうか分からないんですけど/偉そうなこといえませんが |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

例えば、例11における下線部の「本当の政治ってよく分からないけど」という部分は「自己主張の緩和に関する前置き表現」だと捉えられる。

#### 例11

IKO：……七年で、あっ、じゃ、もう、二回も大統領選挙を経験したんですね(そう) {笑う} どうですか↑、台湾の政治は、  
HAR：んー、まあ、ね、難しいけど、僕も、よ、本当の政治って、よく分からないけど、なんだろう、やっぱり、台湾って、こう、もったいないよね、そのーね↓、中国の問題があって、(はい) こう、国で、ちゃんと一つの国なのに、こうー、国じゃない扱いを受けてるでしょ↑……

例11においては、応答者の HAR は台湾の政治について、意見を求められている。HAR は応答発話の冒頭で、「本当の政治ってよく分からないけど」と言いながら、その後、具体的に台湾が置かれている立場をうまく述べてくれている。それは、国際関係に詳しくなかったら、絶対指摘できない内容だし、台湾を1つの国として言及したくない中国政府にとっては、まさにタブーであることなので、HAR の言う「本当の政治ってよく分からないけど」という表現は自己主張を和らげるための前置き表現だと分かった。このような前置き表現は正式な応答内容が出される前のものなので、準備表現の1種として捉えている。

## 6.2 「挿入連鎖」の表現形式

### 6.2.1 聞き返し

インタビューの応答者側は的確な返答を提供するために、聞き返しという挿入連鎖を使用していることが観察できた。今回取り扱った会話の性質と発話前後の文脈から判断すると、データでは「理解の確認要求」と「説明要求」の2つの意図が殆どであったが、応答者側が返答しようとするトピックは適切かについて確認を求める意図も考察できた。それらの意図で発した聞き返しの表現形式について表6の通りに整理する。

表6：「聞き返し」の表現形式

|         |                                                |
|---------|------------------------------------------------|
| 理解の確認要求 | ～っていうのは、～(ですか↑)/～ってことですか↑/～ですか、それとも～ですか↓/～ですか↑ |
|---------|------------------------------------------------|

|              |                          |
|--------------|--------------------------|
| 説明要求         | どういった～なんでしょうね/どうって言いますと↑ |
| 理解の確認要求か説明要求 | 疑問助詞カが付かない上昇音調の語句        |
| 応答方向の確認      | ～けど、いいですか↑               |

次の例12と例13にはそれぞれ「理解の確認要求」と「説明要求」という聞き返しが入っている。つまり、例12における2 INO の発話は RYO の情報要求に対する「理解の確認要求」で、例13における2 KIT の発話は CHO の情報要求に対する「説明要求」の聞き返しである。

#### 例12

1 RYO：台湾に対するイメージはどー#ですか↓  
2 INO：んー#最初は、あのー^#あっ、人々ですか、それとも環境ですか↓  
3 RYO：あ、なんでもいいです、  
4 INO：あ、環境(はいはい)最初私もっと、あのー^#、タイチュウ市なのでね(はい)少しとは聞いてたんですけど、(はい) ………

#### 例13

1 CHO：……えーと台湾の、台湾に関する情報はどこから、えっ、得ますか、いつも、  
2 KIT：台湾に関する情報、(はい) どういった情報なんでしょうね  
3 CHO：えーと、あらゆる情報、あの政治とか経済とか文化とか

例14において、2 OKA～5 LIU の発話交換は聞き返しの挿入連鎖だと考えられるが、2 OKA の発話は「理解の確認要求」か「説明要求」の判別は難しい。しかし、応答者の OKA は上昇音調の語句を使用することによって、聞き返しの効果をもたらし、適切な応答をするための「準備」をしていることが窺える。

#### 例14

1 LIU：……で、まあ、ずっとタイチュウにいらっしゃいますから(うん) まあ、タイチュウ、まあ、来年、また、選挙するから、(うん)ん、タイチュウのそういう、建設とか、或いは、どう思います↑=或いは、  
2 OKA：=建設↑  
3 LIU：そのー、なんって言ったらいいかな、あのー建物とか(うん) そういう、  
4 OKA：うん、建築、不動産関係ね、  
5 LIU：そうそうそう、はい  
6 OKA：それはねー、えーと、ちょっと、 ………

なお、例15における KIT の発話は「理解の確認要求」か「説明要求」の意図はなく、応答者側が返答しようとするトピックは適切かについて確認を求めるものである。この

実例においては、インタビュアーのCHOは、「日本にはいいもの、台湾にもあってほしいもの」について、情報を求めているが、応答者のKITはCHOの言う「もの」をめぐってピント来ないようである。そこで、KITは自分の返答が「サービスにあたるもの」になってもいいかと、CHOに確認を求めている。

#### 例15

- 1 CHO: ……………えーと日本にはいいもの、台湾にもあってほしいもの、ありますか↑  
 ⇒ 2 KIT: 日本にあっていいもの(はい)日本にあっていいもの、^ ものですか↓(はい)もう売っているものとか、(はい)そういうものですか↑、ちょっとね、ものって言って、これサービスに当たると思うんですけど、いいですか↑  
 3 CHO: いい、いいですよ、はいはい  
 4 KIT: 例えば、あの一、ものなんかいくらでも、台湾、日本、台湾で買えますよね、で、わたし、特に必要なものってないと思いますね(はいはい)で、……………

このような意図を持つ聞き返しの発話は、インタビュー会話における特有な挿入連鎖でもあり、1種の応答発話の準備技術だと捉えられる。

#### 6.2.2 情報要求の提示上の援助

本節では、もう1種類の挿入連鎖について説明を行う。例えば、例16においては、インタビュアーのLINは、日本のサブ・カルチャーを気に入った台湾の人が増えていると話して、そのような顧客が台湾の日系デパートへ日本の品物をどんどん買い求めに来るだろうと思っている。しかし、LINの情報要求の発話はどうも行き詰まっているようである。そこで、日系デパートに管理職として勤めているOHAというインタビューの応答者はインタビュアーのLINの発話が行き詰まっているのを感じ、LINの聞きたいことを推測し、「影響があるっていいことですね」と言う確認表現で発話を受け継ぐ。本稿では、このような挿入連鎖も応答発話の準備技術として考えている。

#### 例16

- 1 LIN: あと最近、「哈日族 <harizu>」ね、「哈日族」、あの、日本ブームがすごい(あー)だけど、(うん)デパートのえいぎょう、……………の業績に、いい、いい、あの一、なにかね  
 2 OHA: 影響があるかっていいことですね  
 3 LIN: はいはい  
 4 OHA: うん、例えば、日本の漫画↑(はい)すごく人気っていう……………

本稿では、上記の例16のような2 OHAで出現する行動を「情報要求の提示上の援助」と呼ぶ。その表現形式につ

いて、上記の例16のほかに、下記の例17のような言語行動も観察できる。

例17においては、応答者のOKAはLIUの情報要求の発話で冗長だと感じたようである。結局、OKAはLIUの聞きたいことを推測し、「経済的になかなか不安定な部分を抱えてるってわけですか↑」と言って情報要求の発話に割り込んだ。

#### 例17

- 1 LIU: ……………なんか、台湾政府側が、そういう消費税が(うん)そのこく年金のために↑、(うん)1パ、1パーセントアップするようー(うんうん)話もありまして、(うん)そういう面=で言えば  
 2 OKA: =経済的になかなか不安定な部分を抱えてるってわけですか↑、  
 3 LIU: うんうんうん  
 4 OKA: それはー、やっぱり、台湾もね、あの、経済力からすると、……………

上の実証を通して「情報要求の提示上の援助」の表現形式について、次の2つを記述することができる。

- 1) 応答者はインタビュアーの情報要求の発話が行き詰まっているのを感じて、インタビュアーの聞きたいことを推測し、次のような確認表現で発話を受け継ぐ。  
 ①上昇音調付きの語句。②「～かっていいことですね↑」の表現。
- 2) 応答者はインタビュアーの情報要求の発話で冗長だと感じて、インタビュアーの聞きたいことを推測し、「～ってわけですか↑」のような表現を用いて、情報要求の発話に割り込む。

## 7. 「展開技術」に関する記述

「展開技術」とは、インタビューの応答者が情報要求者のインタビュアーの存在に配慮しながら、長い発話を発展していくための計画表現を指す。それについて、前置き表現の活用、相手同調の誘発、自問自答の応答展開、の3種類の技術が確認できた。「展開技術」と「準備技術」の差異であるが、「展開技術」が現れる位置は応答発話の冒頭にも応答発話の途中にも現れうる。そして、「準備技術」の性質とは違って、相手同調の誘発と、自問自答の応答展開と言った「展開技術」は、話者の伝達したい本筋には入っていないが、伝達内容と深く関わっている。

「展開技術」における前置き表現は「準備技術」で記述した前置き表現と同様であるので、それについては6.1.5節の表4を参照されたい。本節では、相手同調の誘発と、自問自答の応答展開についての分析結果を記述する。

## 7.1 相手同調の誘発

「相手同調の誘発」とは、応答者はインタビュアーから同調を誘発した上で、応答発話を進めていく言語行動である。事例18の下線部のように、応答者の KIT は「～よね」の表現を用いてインタビュアーの CHO から同調を得ながら、長い発話を続けていく。それは情報要求に対応する返答の進展計画の1種だと考えられ、長い発話を進めていくための不可欠な表現だと言える。

### 例18

CHO：えーと台湾で、台湾で生活をなさっていて、(え↓)何か好きになさったこととか好きなものとかありますか↑  
KIT：台湾に関することですか↓(はい)台湾に関することで、好きになったこと、すー、そうですね、あ、あの一いま、ほら、日本の、ね↓、文化がい、たくさん(うん)入りすぎちゃって、こ、台湾のオリジナルなものがすくないですよね↓、(はい)うん、だけど、そのなかでもやっぱり、伝統的なものっていうのが、のこり、残っていますよね↓、(はいはい)だから、そういう、なんというんでしょうね、……………

また、下記の実例19における JAA の発話にある下線部の上昇音調も JAA からの同調の誘発だと考えられ、そう言った標識によって、長い発話が続くわけである。

### 例19

CHE：じゃ、あの、パートタイムっていう(うん)形式ですか(うんうん)あの一、これはこれからの流れ、と思いますか↑  
JAA：……でしょうし、まあ、そういった意味では(うん)その契約制っていう(うん)或いは、パートタイムっていう(あ、契約)考え方↑、(はい)ま、こういったことも、今後検討して、えー、行くべきなのかなとは思いますが、(あー)いまのところは、……………

「相手同調の誘発」の表現形式について、今回取り扱ったデータを確認すると、「～よね↓/～でしょ↑/～じゃないんですか↓」のような表現、および例19における JAA の発話に出現した上昇音調のような表現が観察できた。

## 7.2 自問自答の応答展開

自問自答の応答展開は、次の2種類があると考えられる。1つは、応答者はインタビュアーの聞きたいことを先取りして、インタビュアーの代わりに応答者自身が自分に向かって疑問を出して、そして回答を行うものである。もう1つは応答者が応答発話をしている途中、相手が自分の陳述や説明を理解したかどうかにか配りをした結果生じたものである。前者に関する事例は次の例20で、後者の事例は

例21になる。

例20においては、インタビュアーの IKO が「でも」と言いながら、情報を求め続けていこうとしているにも関わらず、インタビューされた HAR がインタビュアーの質問したい内容を先取りして、それまで展開されてきた情報要求の内容を受け継ぎ、自問自答の形で応答を展開していつている。

### 例20

IKO：でも、さっき、あの、し、あの一、はら、おっしゃったの、そう、まあ、いちおう、日本の(うん)そういう発展の(そうそうそう)流れ(そう、流れ)ですね、=でも  
HAR：=そのなかで、じゃ、今台湾はどうかっていうと、まあ、これは、僕の感想なんだけど……

例21においては、インタビューの応答者の KAT は自分の今住んでいる台湾の都市の住心地について述べている。下線の部分は、発話の途中で現れる「自問自答」である。応答者はこうした形を通して発話をどんどん展開していくことができる。

### 例21

KAT：……………だから、台湾に住んでるひとは、じゃ、それで不便だと感じないから、俺たちみたいに、日本に住んだりとか、香港に住んで↑、(うん)で、「たいちゅう」に來ると、香港は何でもある国だから、やっぱり(はい)だから、それと比較した場合はやっぱり台湾のほうは比較的、ないかん↑、ただ、それがいいからっていつて、じゃ、生活困りますかっていつと、それはぜんぜん困りませんよと(うん)それは……………

上記の2種類の自問自答の応答展開における「自問」の部分は発話展開の標識として考えられ、それに関する表現形式は「なんでかっていつと、～/どちらかっていつと、～/なんで～の↑、っていつと、～/じゃ、今～はどうかっていつと、～/なんで違うかっていつと、～」などが取り上げられる。

## 8. まとめと今後の課題

本稿では、インタビュー会話の応答者側がインタビュアーの情報要求に対する応答発話の「準備技術」と「展開技術」について考察を行った。「準備技術」には準備表現と挿入連鎖があると考えられる。さらに、準備表現を、返答内容の搜索表示、返答の困惑表示、質問された内容のポイントの繰り返し、発話の受け継ぎの表示、回答しようとする内容の前置き表現、の5つに分けることができ、準備技

術としての挿入連鎖には、「聞き返し」と「情報要求の提示上の援助」の2つが観察できた。また、「展開技術」について、前置き表現の活用、相手同調の誘発、自問自答の応答展開、の3つの技術が記述できた。これらの表現を「技術」と呼ぶ理由は日本語非母語話者や日本語学習者の立場から見た観点である。つまり、会話において日本語母語話者にとって自然に表現できるものは、非母語話者にとっては学ぶ技能だという部分が多い。もちろん、これらの技術は、単独で使われる場合もあれば、異なる技術が連続して現れる場合もあった。しかし、日本語学習者にとっては、本稿のような基本分類と基礎記述は1つの会話習得上の手助けにはなるだろう。

なお、今回の結果はインタビュー会話をデータにして記述したものであるが、インタビュー以外の場面における会話でも、本稿で記述した準備技術と展開技術で通用する場合は少なくない。ただし、場面によって、「返答内容の検索

表示」や「返答の困惑表示」という準備技術の多用を回避すべき場合もある。つまり、ポライトネスの観点から、本稿で取り上げた技術を分析する必要がある。また、日本語学習者にとって習得しにくい技術や乱用しやすい技術はどれかを知るために、学習者側の応答発話を実際に収集し、そして比較分析の作業が求められるだろう。

## 注

- 1) 劉・呉 (2000) は台湾に長期滞在している日本人がどのように台湾の社会文化を感じ取っているかについて関心を持ち、45名の日本人に意識調査を行った。その結果、長期に渡って台湾に滞在した日本人が感じた台湾社会と台湾人の国民性の特徴がいくつか取り上げられている。劉・呉 (2000) の意識調査にはアンケート調査と面談調査がある。面談調査の部分は、8名のインタビュアーが33名の日本人に対して、対面インタビューを行ったもので、インタビューの内容はすべてMDレコーダーで録音された。
- 2) 応答者としての日本語母語話者に関するプロフィールは下表の通りである。

| 応答者     | 職業・年齢       | 出身地 | 在住年数 | インタビュアー       | 録音時間  |
|---------|-------------|-----|------|---------------|-------|
| 1. SUG  | 女性 主婦・34    | 徳島  | 約2年  | (1)RYO・29才・女性 | 約 16分 |
| 2. INO  | 女性 主婦・33    | 神戸  | 約2年  | 同上            | 約 16分 |
| 3. UCH  | 女性 主婦・35    | 福岡  | 約2年  | (2)GOI・32才・男性 | 約 30分 |
| 4. KIT  | 女性 日本語教師・30 | 東京  | 約2年  | (3)CHO・31才・男性 | 約 70分 |
| 5. MIY  | 女性 日本語教師・29 | 沖縄  | 約3年  | (4)IKO・32才・男性 | 約 50分 |
| 6. KAT  | 男性 管理職・35   | 大阪  | 約3年  | 同上            | 約 65分 |
| 7. HAR  | 男性 管理職・39   | 東京  | 約7年  | 同上            | 約 35分 |
| 8. IKE  | 男性 管理職・37   | 京都  | 約2年  | 同上            | 約 51分 |
| 9. MAT  | 男性 会社員・29   | 神戸  | 約2年  | (5)LIN・32才・男性 | 約 31分 |
| 10. OHA | 男性 管理職・35   | 東京  | 約4年  | 同上            | 約 20分 |
| 11. OKA | 男性 管理職・45   | 東京  | 約6年  | (6)LIU・32才・男性 | 約 28分 |
| 12. SAK | 男性 教諭・42    | 山口  | 約2年  | 同上            | 約 39分 |
| 13. MAU | 男性 管理職・44   | 東京  | 約3年  | (7)CHE・32才・男性 | 約 27分 |
| 14. TAG | 男性 管理職・42   | 東京  | 約4年  | (8)HON・31才・男性 | 約 62分 |

- 3) その根拠は4要素がある。①全員日本語能力試験1級合格、②3年以上の日本留学経験、③日本の大学院を卒業した学歴、④日本の企業と取引している会社か日系企業に採用された実力があつたこと。ちなみに、インタビュアーの母語は台湾語と北京語で、日本語非母語話者であるものの、現在台湾で就職し、職場では日本語で母語話者とコミュニケーションを行わなければならない状況下にある。
- 4) 「問い」という発話の後に「返答」という発話が返ってくる現象は隣接ペア (adjacency pair) と呼ぶことができる (Schegloff & Sacks 1973)。しかし、問いの後にすぐに返答が続かない場合もある。例えば、次の例は、問いー返答ペアが別の問いー返答ペアを内包したもので、Q 2 と A 2 は挿入連鎖 (insertion sequences) の1種である (Schegloff 1968)。
 

A: May I have a bottle of Mich?      (Q 1)

B: Are you twenty-one?              (Q 2)

A: No.                                      (A 2)

B: No.                                      (A 1)

(Merritt 1976: 333)
- 5) 本稿では、マーカーという用語の定義について、西野 (1993) が主張しているディスコースマーカーの定義に従う。つまり、会話のプロセスの中には内容そのものの情報の他に、会話に

- とって不可欠な要素が情報として含まれている。たとえば、その会話の内容理解を助けるためのもの、会話者間のやりとりをよりスムーズにするためのもの、会話者間の人間関係を円滑にするためのものなどが考えられる。会話の流れの中で、このようなある種の談話の中の情報を標す (マークする) ものをディスコースマーカーと呼ぶ (西野1993: 89)。
- 6) 情報要求の機能をもつ先行発話から発話権を取得する基本形は「答え+関連情報の添加」だと報告されている (李1995; 木暮2001)。
- 7) ここで言うコミュニケーション・ストラテジーは中間言語の研究における術語である。つまり、接触場面の会話における非母語話者側が、伝達や聴解上の能力の不足を補うために使用される方策である。
- 8) フィラーの定義と種類に関して山根 (2002: 49) に従い、つまり、フィラーとは「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない、発話の1部分を埋める音声現象」を指す。
- 9) 李 (1997) によると、話者は自分の発話ターンの中で情報を持続的に伝達しようとするとき、持続表示、注目要求、時間稼ぎ、他者無視と言った言語行動を取るとした。
- 10) その具体例について、李 (1997: 69) が挙げている例を書き直

すと、次のような発話例の下線部に当たる。

「ちゃんとさー，(うん)何でも終わらせて行こうと思うんだけどー」

- 11) インタビューにおける応答者側が情報の提供を求められた際に、やや長い発話が許されるという性質を持つ。本稿では、そのような性質を利用し、応答者側の応答展開の仕方に注目した。

## 参考文献

- 尾崎明人 (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー —「聞き返し」の発話交換をめぐって—」『日本語教育』81号 日本語教育学会 pp.19-30.
- (1996) 「会話教育のシラバス再考—会話の展開と問題処理の技術を中心に—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第4号 名古屋大学留学生センター pp.119-135.
- 黄英哲 (2002) 「情報要求に対する日本語母語話者の「応答展開上」の管理技術」『平成14年度日本語教育学会第11回研究集会予稿集』日本語教育学会 pp.91-97.
- (2003) 「日本語のインタビューに見られる応答発話の「準備技術」について」『平成15年度日本語教育学会第1回研究集会予稿集』日本語教育学会 pp.81-84.
- 木暮律子 (2001) 「表現形式から見た発話権取得の方法—情報要求発話を受け継ぐ場合」『平成13年度日本語教育学会第9回研究集会予稿集』日本語教育学会 pp.14-19.
- 下瀬川慧子 (1999) 「『日本語話し方技能シラバスチェックリスト』試案」『東海大学紀要留学生センター』19号 pp.1-15.
- 谷口すみ子 (1989) 「会話教育のシラバス作りに向けて—会話の技術のリスト試案—」『日本語教育』68号 日本語教育学会 pp.259-266.
- 西野容子 (1993) 「会話分析について—ディスコースマーカーを中心として—」『日本語学』第12巻第5号 明治書院 pp.89-96.
- 畠弘巳 (1988) 「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語学』第7巻第3号 明治書院 pp.100-117.
- 初鹿野阿れ (1998) 「発話ターン交代のテクニク—相手の発話中に自発的にターンを始める場合—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24号 pp.147-162.
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
- 李麗燕 (1995) 「日本語母語話者の会話管理に関する一考察—日本語教育の観点から—」『日本語教育』87号 日本語教育学会 pp.12-24.
- (1997) 「日本語母語話者の会話における「情報伝達行動の持続」」『世界の日本語教育』第7号 国際交流基金日本語国際センター pp.61-75.
- 劉美鈴・吳佳臻 (2000) 「駐台日人對台湾社会文化的感受〔台湾に在住した日本人が台湾社会文化に対する感じ方〕」『2000年度僑園學術論文獎徵文作品』財團法人僑光校友學術基金會
- Merritt, M. (1976) "On questions following questions (in service encounters)." *Language in Society*. Vol.5, No.3, pp. 315-357.
- Schegloff, E.A. (1968) "Sequencing in conversational openings." *American Anthropologist*. Vol.70, No.6, pp. 1075-1095.
- Schegloff, E.A. & Sacks, H. (1973) "Opening up closings." *Semiotica*. Vol.8, pp.289-327.

## 付記

本稿は、日本語教育学会の平成14年度第11回研究集会(平成14年12月, 広島大学), 及び平成15年度第1回研究集会(平成15年6月, 南山大学)における口頭発表を基に, 修正と補足を加えたものである。